



艶巫女の棲家

～僕と母娘の極甘研修～

北條拓人

挿絵 / asagiri

立ち読み版

序章	魅惑の母娘巫女	4
第一章	美少女巫女の暴走洗礼	21
第二章	艶歴女の痴的青空教室	63
第三章	メイド巫女の恩返し	113
第四章	熟母巫女の豊乳研修	156
第五章	純正美少女の処女奉仕	195
終章	母娘巫女の嫁入り	253

登場人物

Characters

坂田 健太

(さかた けんた)

入社早々狸穴稲荷神社に出向を命じられた二十三歳の新社会人。おっちょこちょいながら何事にも一生懸命なお人好しの青年。

松代 深雪

(まつしろ みゆき)

狸穴稲荷神社の神主。しっとりとした和風美人の三十五歳。穏やかで上品で貞淑な未亡人。Gカップの巨乳、左右に張り出した大きな臀部など、男好きする肉感的な体形。

松代 優羽

(まつしろ ゆう)

深雪の長女。家計のためにメイド喫茶でバイトする十七歳。一見すると冷たい美人に見えるものの、実際は世話焼きで家族思いな性格。長身、Dカップのモデル体形。

松代 里緒

(まつしろ りお)

深雪の次女。物おじせずにはきはきとモノを言う、活動的で大胆な性格の十六歳。童顔で小柄な体形ながら、張り艶のある肌にCカップバストの早熟な肉体を持つ。

唐沢 穂香

(からさわ ほのか)

各地の神社仏閣を巡るのが趣味の歴女。明るく快活で、性に対しても奔放な二十六歳。セルフフレームの眼鏡を掛けた理知的な容姿に、フェロモンたっぷりの豊満な体形。

第一章 美少女巫女の暴走洗礼

1.

「まあ、あなたが坂田健太さん？　こんなに早く赴任される方も珍しいわね」

狸穴神社の右側の敷地の社務所と渡り廊下で連なる建物に、健太は案内されていた。

「わたしは松代まつしろ深雪みゆきです。先ほどは、本当にお世話になりました。そして、長女の優羽と次女の里緒です。よろしくお願ひしますね」

「こ、こちらこそ。よろしくお願ひします」

丁寧ていねいに深雪に紹介され、あらためて健太は頭を下げた。

（ウソだろう……。これからしばらくは、この美人母娘とひとつ屋根の下ってこと？　きたきたきたーっ！　超ラッキー!!）

里緒を呼んでいたのが、先ほど二の鳥居で別れたアイズドールの優羽であり、この居住スペースとなる離れには、母親の深雪と三人で暮らしているのだそうだ。

居間に据えられた四角い座卓の前に座る三人の母娘に対面し、珍しく健太は神妙な面持ちで、きちんと正座している。

「あの、僕は、すぐに赴任するよう指示されまして、早いほどいいのかと……」

研修先の神社近くには適当なアパートがなく、研修生は皆この神社に住み込みになるのだという。

気の早い健太は、指示を受けて二日も経たぬ間に、さっさと荷造りを済ませ、もうここに現れたのだ。とはいってもその健太としては、学生時代から住んでいたアパートに、さしたる荷物があつた訳ではない。元々があまり物を置かない性分であり、いくらかの衣類と布団さえあればという身軽な生活を通してのこともあった。

「それにしても、アパートを引き払うなり、荷物をまとめるなり、色々あつたでしょうに……。第一、あなたのお荷物、まだ到着もしていないわよ」

半ばあきれ顔で優羽が言った。どうやらこの家で一番のしつかりもので、物事を順序立てて考えるのが、彼女の役割らしい。

玲瓏な美貌がクールに冴え、とても高校生に見えないほどだ。とはいえ、そのブレザーの制服は、ものすごく似合っている。腰部まであるストレーティングの黒髪が、女子高生の印象を保つのだろう。

「まあ、まあ。早く赴任して頂いて、文句を言う筋合いではないでしょう」

おっとりとした口調で、深雪が取り成してくれる。そのはんなりとした美貌に、健

太はまた鼻の下を長くした。別段、熟女好きという訳でもない健太だが、とてもふたりの娘を持つ母親に見えない彼女だから、実年齢など関係なく、美しいものは美しいと見惚れてしまうのだ。

しかし、巫女姿の末娘、里緒はともかく、深雪と優羽までもが狸穴稲荷の住人だとは思ってもいなかった。

「でも、うれしいわ。親切な坂田さんが、今回の研修生だなんて」

二の鳥居からの分かれ道は、松代家の勝手口に続く道だと、深雪が教えてくれた。上品な和服姿で、やわらかな笑みを浮かべている母親の隣で、ひとり里緒がアヒル口を突き出し気味にぶんむくれている。

「でも、研修生なら研修生らしく、赴任先には背広じゃない？ これまでのみなさんは、背広でいらっしやっていたわ……」

憤懣やるかたない様子で、里緒が糾弾してきた。

新入社員らしく背広を着ていれば、参拝客と間違えることなどなかったのにと言いたいのだろう。その眼には、どうしてもっと早く教えてくれなかったのかと、詰るような光も込められている。それでも十分以上に美しかった。というより、きつと目を剥くような硬い表情が、一種凄みのある美しさを彼女に与えるようだ。

その美貌を健太は完璧と思った。

大きな目、高くないがまっすぐに筋の通った鼻梁、そして小さな口が、完全なバランスで配置されている。顎の線はシャープで見事な顔の形を作り出している。もう少し、年齢がいけば、頬からのラインはもっと完成された美を描くはずだ。

まだ顔に少女らしいあどけなさが残っている。それが、一層刺激的に思えた。

前髪が眉を越え、目の上ぎりぎりまで垂れている。残りの髪はまっすぐだ。

（やばい。怒っているよ。そうだよな。身体を触らせてまでもらったものなあ……）

けれど、それをはつきりと口にしないのは、「このことは、内緒にしてくださいね」と彼女が言い残したことと関係があるらしい。つまりは、あのサービス（？）は、母親たちには内緒ではじめたことなのだ。そう察した健太は、里緒の冷たい視線を浴びながらも、余計なことには口をつぐんだ。

「あら、ここでの服装に規定があるわけでもないのだし、山歩きには身軽な服装が基本よねえ」

いきさつを知らない深雪は、やさしくされたこともあってか、終始健太を庇ってくれる。それがまた、末娘の里緒には癪に障るらしい。

「大人としてどうかと思うけど……。今年の研修生さんは不作。まじ、信じらんない」

毒舌を吐き里緒がふいっと顔を背けると、おかつぱロングの髪がふわりと揺れた。

「さつきから里緒は何を怒っているの？ あんたたち何かあった？」

勘の鋭そうな優羽に突っ込まれると、さすがに里緒があわてた。

「うーん。何でもないよ。まあちよつと、お姉ちゃんが来るまでに、とんちんかんなやり取りがあっただけ」

里緒の矛先が逸れはじめたのを期に健太も話題を変えにかかる。健太とて、里緒との不適切な行為をこのふたりには知られたくないのだ。

「それにしても、荷物はどうして着いていないのでしょうか？ 一昨日の夜には発送したのに……。僕だけが、先に到着するなんて……」

「一日も経たずに引越しの荷物をまとめてしまったの？ よくもまあ、そんなに早く……。でも、荷物が届かないのは、よくあることね……。以前の研修生なんて一週間もどこかを荷物が彷徨っていたの」

優羽の言葉に、健太は少し驚いた。海外でならいざ知らず、この物流の発達した日本で、そんなことがあるなど思いもしないことだった。

「荷物が届くまでは、うちにある布団で過ごしてもらえばいいわ。困るのは衣類ね。何か、あったかしら？ ちよつと探してみるわね。里緒、ちよつと手伝ってくれる？」

優羽は坂田さんをお部屋に案内して……」

さっそく腰を持ち上げた深雪だったが、捻挫した足首の影響があったのだろう。「あつ」と短い悲鳴をあげ、体勢を崩した女体が前方に倒れてきた。

「危ない！」

座卓に倒れかかる深雪を咄嗟に助けようと、対面していた健太は反射的に立ち上がった。けれど、座り慣れない正座に足が痺れていて、立ち上がりはしたものの下半身にまるで力が入らなかつた。

「うわああっ」

がくと膝が折れ曲がると、四角い座卓を挟み、深雪を腕の中に抱え込んでいた。奇妙な体勢でかろうじて立ち、腕の中の深雪を守るのだ。

（うおおおっ！　なんて素敵な抱き心地！　深雪さんやわらかいっ！）

和服では、あまり身体の線がはつきりしないが、明らかにムンと匂い立つほど熟れきった女体が健太の胸板に預けられている。特に、その胸元は凄まじく、熟れ頃も極まったボリウムで、水風船にスライムを入れてパンパンに膨らませたような悩殺の乳房が、ふたりの間に挟まっているのだ。

おんぶした時の熟尻の触り心地とはまた違った、蜜乳の蕩ける感触に、健太は快哉

を上げてしまいそうなのを必死に堪えた。

「だ、大丈夫ですか？」

腕の中の美貌を覗き込むと、動揺したのか深雪は頬を真っ赤に染めている。

「大丈夫、お母さん」

両脇からふたりの娘に助け出された深雪は、いかにも恥ずかしげだった。目元までぼうつと赤く染めた姿は、可愛らしくもあり、色っぽくもある。

「いやだわ。わたししたら……」

長い睫毛を軽く伏せ、可憐な立ち居振る舞いで首を振る深雪。凶らずも滲み出した湯けむりにも似た色香に、ひたすら健太は背筋をゾクゾクさせた。

2.

木造の急階段が、足を乗せるたびギーッと悲鳴をあげる。

思いのほか響く音に、まるで泥棒のような気分になり、健太は思わずギクリとした。「ずいぶんと、ボロ屋でしょう？」

健太を部屋へと案内して先を歩く優羽は振り返りもせずそう言った。

「えっ？ いや、うーん。歴史があると言うか、風格があると言うか……」

さすがに優羽のように直截には言えないが、もちろん内心ではボロいと思っている。階段の軋みも気になるが、踏板が体重に負け、今にも破れそうで気が気でない。

「はつきりいいなさいよ。構わないから」

「でも、掃除がきちんとされていて、汚いわけではなさそうだし……」

クールに言い放つ優羽に、言外に本音を匂わせた。

「そりゃあそうよ。なにせうちは女所帯なのだから、清潔なことは確かよ」

それは強調しなかったのか、アイスドールがぐるりとこちらに振り向いた。

理知的な美貌には、けれど年相応の若さも見え隠れしている。そこがブレザーの制服とマッチして、独特の色気を醸し出している。しかも、モデル張りの体型に、いまどきの女子高生らしく短い丈のスカートがよく似合っていた。

少し見上げると、スカートの中が覗けてしまいそうで、ちよつと目のやり場に困る。

「パンツ見たら、ただじゃおかないからね……」

彷徨う視線を怪しいと見たのか、優羽が念を押してきた。

濃紺のブレザーに白い絹のような光沢のあるシャツブラウス。全体に細身のイメージがあるが、意外なほど豊かな胸がそのブラウスに丸いふくらみを作っている。

タイトでミニ丈のスカートは、太ももを申し訳程度に覆うばかり。膝が目立たない

まっすぐな脚だった。

「健太さんの目、いやらしい！」

なおも冴えた美貌が、冷やかな視線を送りつけてくる。

動揺を誘われるほどの美しさ。気圧されるほどの気品。深雪や里緒とはまた違った少女の美しさに一瞬打たれたようになった。

窓の光に透かされて、その頬の天使の産毛がふわふわと輝いている。

「み、見ませんよ……。それはそうと、女所帯って、優羽ちゃんたちのお父さんは？」
ドキリとした内心を見透かされまいと話を逸らした。

「神主だった父は、六年前に亡くなったの……。だから松代家は女の園よ」

急に優羽がおどけた口調になったのは、寂しさを隠したものだろうか。健太は聞いてはいけないことを聞いてしまい、何と言葉を続ければよいか判らなくなった。

「安心して。健太さんの研修は、私たちがきつちり見てあげるから……。だから、私のことを優羽ちゃんなんて気安く呼ばないでね。ああ、それと、お母さんが未亡人だからって、色目を使わないこと！」

きつちりと釘を刺されると、かえって深雪の麗しい美貌が脳裏をちらつく。その極上の抱き心地や、バラの花束のような甘い匂いまでもが、まだ腕の中にあるようだ。

「だから、そのニヤケ顔が、いやらしいって言うのよ……」

優羽の冷たい視線が、ぷいっとまた正面に向けられる。

スカートの裾が揺れ、盗み見るまでもなくピチピチした太ももが覗けた。紺のハイソックスの切れ目から絶対領域にかけての眩しい白さにハッとさせられる。

（お母さんに似て、優羽ちゃんも色白だから……。太ももなんて、なかなか日焼けしないだろうし……）

年齢特有の足のむくみもなく、カモシカの如く脚が細く美しいラインを描いている。未だ成長途上にあるのだろうが、きゅっと引き締まった腰部のくびれや腰高の臀部から連なる脚線美などは、同性からも羨まれるであろうと想像される。

（深雪さんの立派なお尻も捨てがたいけど、優羽ちゃんのお尻もやわらかそう……）
優羽から見ると念を押されているにもかかわらず、健太の視線は自然とそこに張りついてしまう。急階段の角度から、ちょうど健太の目の前で優羽の美尻が揺れるのだからそれも致し方ない。

しかも、制服に沁み込む匂いを気にしてか、優羽は柑橘系の甘い匂いを纏っていて、その良い匂いにも誘われてしまうのだ。

（いかん、いかん。優羽ちゃんは未成年だ。犯罪になるぞ……）

悩ましい美臀にともすれば触れなくなるのを必死に堪え、健太は優羽の後を歩いた。階段を上りきると、細長い廊下が延びている。

二階は三つの部屋をぐるりと囲むようにして配された回り廊下となっていた。

「この家はぼろいけど、広さだけは十分以上にあるのね。だから三部屋とも空いているけど、健太さんは一番奥を使って」

手先まで神経の行き届いた所作で、優羽は障子戸を開け放った。

物言いはきつい、彼女の一つ一つの動作は、女性らしく優美で丁寧なのだ。それも、明らかに一朝一夕の付け焼刃で身につくようなものではない。

（里緒ちゃんの身のこなしもそうだったけど、きちんとした躰を受けているから、上品な物腰でいられるのだろうな……）

健太は感心しきりで、優羽の横顔を見つめた。

小高い頬の稜線で、ハリのある肌が瑞々しく輝いている。

（ああ、すっかりしているけど、やっぱり若いんだ……）

女子高生の優羽とは、六つも離れていない健太だが、ぼんやりそんなことを想った。「で、さつき里緒と何をしていたの？」

荷物も何もないがらんとした畳の部屋に、優羽の中音域の声が溶け込んだ。

「へっ？」

不意を突かれ、すつとんきような声が口から漏れる。明らかな動揺は隠しようがなかった。

「健太さん、里緒と同じ方向から出て来たわよね。お社の裏には森林があるばかりで、何もないのよね。まさか里緒も参拝客を本殿に案内するはずもないし。そんな方からふたりとも来るなんて、おかしいじゃない」

年下の鋭い突っ込みに、健太はたじたとした。頭の中では、作り話でもでっち上げようとフル回転させているものの、瞬時にそんな話ができあがる訳もない。

「えっ、あ、そ、そうだったかなあ……。僕は、ここ、ここが初めてで、ま、迷子になっていたから……」

里緒とは偶然そこで出会ったと、苦しい言い訳を試みたが、拝殿と本殿が連なるばかりの単純な構造のお社では、迷うも何もあったものではない。

「ウソをつくのヘタね。うふふ。でも、いいところあるじゃない。里緒をちゃんとかばってくれるなんて……」

全てを見透かすような視線がふいに緩み、やわらかな笑みを纏った。途端に、華やかに彩られ美女オーラが一段も二段も増した。

「私もちよつと健太さんに興味出て来ちゃつたなあ」

冴えた美貌に小悪魔の表情が宿ると、一種凄絶な迫力があつた。怖いくらいに美しく、それでいてものすごくチャーミングなのだ。

どういう意味での興味なのか真意は判らない。「私も」の^もが、誰にかかるのかも見当がつかない。けれど、ドキリとさせられたことに違いはなかつた。

「じゃあ、私、行くね。食事までまだ間があるから、ここでくつろいでいて」

唐突にくるりと踵を返し、颯爽と引き返す優羽。腰部まであるストレートロングの黒髪が、弾むように揺れるのを健太はまたしても見送る。おかつぱロングの里緒に置いてきぼりを食つた時と同じような既視体験に、ただただ呆然とした。

3.

「あの……。コンコン……」

することもなく、ぼんやりと身体を畳に横たえていた健太は、障子の向こうに人が立つたことをその気配で察していた。もつと言えば、ギシギシと階段の軋む音で、誰かが上がってきたことは承知していた。その声で、すぐに里緒と判つたが、声でするノックをはじめて聞いた。

（お前は狐か！ でも、カワイイ！）

いきなり障子を開くわけにもいかず、それでいてどう声を掛ければいいのか判らなかつたのだろう。

「どうぞ……」

身体を起こした健太は、その場に胡坐をかくと、障子が横に開いた。

膝頭を床についた姿の里緒がそこにあつた。それは優羽と同様、きちんとした躰を受けているゆえの姿なのだ。

（深雪さん、おっとりしているように見えるけど、意外と躰にはうるさいのかも……）
明日からの研修が思いやられないでもないが、けれどそれは深雪の性格を表しているようで、好もしく思える。

「母が、これを持って行くようになって……」

里緒が恭しく両手で前に抱えているのは、数枚の着替えのようだ。

深雪の性格なら、本来は自分で運んでくるのだろうが、やはり捻挫が響いているのかも勝手に案じた。

「ありがとう。お母さんは、足大丈夫そう？」

「うん。ああ見えて、結構おつちよこちよいだから、捻挫とか珍しいことでもないの

よね。そんなにひどくもないみたいだし……」

先ほどのふてつた顔とは打って変わり、その表情は穏やかになっている。■さの残る彼女には、やはり笑みが似合う。

「そう。なら、よかった……」

手渡された着替えを広げて見ながら、健太もやわらかく微笑んだ。

「母を背負ってくれたんですってね。お世話になりました」

思いのほか丁寧な所作で、里緒が畳に手を突いた。

（この娘は、家族思いなんだ……。お父さんを早くに亡くしているせいかな……。）

あれほどつんけんしていた里緒がしおらしいと、なんだか不憫に思えてくる。もちろん、それも健太の勝手な推測に違いない。

「困っている時は、お互い様だから……」

「それにうちのお母さん、美人だしね」

下げていた小顔が上がると、里緒はまたすぐに憎まれ口を叩いた。

「でも、惚れちゃだめだからね」

母親を取られまいとするなど、やはりまだ■なのだと思った。同時に、そんな里緒の誘いに乗り、身体を触ってしまったことに赤面した。

しかし、続く里緒の一言に、健太は面食らってしまった。

「惚れるなら、里緒に惚れてね」

「はあ？」

「だからあ、里緒に惚れなさいって言ってるの」

つまり「惚れちゃダメ」とは、母を取られたくない思いからではなく、母に嫉妬してのことなのだろうか。健太は、先ほどの意味深だった優羽の「私も」のフレーズが指す相手に今更ながら気がついた。

「ええっ？　だって僕、不作の研修生って……。そんな僕に惚れられてうれしいの？」
「やだあ。根に持っているの……。だって、お母さんたちの前では、恥ずかしいじゃない……。気にしているなら、ちゃんと謝ります。ごめんなさい」

それでもまさか里緒が自分に惚れたのかもという事実には、健太は愕然としている。

（今日会ったばかりなのに。僕のこと何も知らないのに……。う、うそだろう？）

まじまじと小顔を見やると、「うん、うん」と里緒が小気味よく頷いてくる。

（待て、待て、じゃあ、さっきの居間での態度はなんだったのだ？　うん？　もしかして、この娘、ツンデレ？）

思えばふたりでいる時の態度と、他に誰かがいる時とでは、驚くほど違い過ぎてい

る。

全てそれで説明がつく一方で、一目惚れなどされたことのない健太だけに、信じられない思いでいっぱいだった。

「それと、健ちゃん。くれぐれもさっきのことは、お母さんとお姉ちゃんには内緒でお願いします」

再び、深々と頭を下げる里緒に、健太はあんぐりと口を開けるしかなかった。

「け、健ちゃんって……。僕のことだよね……」

「だって健太だから、健ちゃんじゃない。それともダーリンって呼ぶ？ 大丈夫。そう呼ぶのは、ふたりだけの時だけだから」

ごろにちゃんと甘えたような表情で、里緒が笑った。

「い、いや。健ちゃん、お願いします……」

やむなく了承を伝えると、華奢な女体がにじり寄ってきた。

「うふふ。健ちゃんと出会えて、里緒はうれしい」

またしても身体を擦りつけてくる里緒に、あわてて健太は話題を振った。

「けれど、ど、どうして里緒ちゃんは、あんなサービズなんか……」

童顔ながら身体は早熟なようで、出るべき所はしっかりと出ている。相変わらず巫

女装束のままの里緒だから、その薄い衣の下の女体が感触として伝わってくる。

「どうしてって……。うちの神社潰れそうだから……」

「潰れそうって、確かに今にも屋根が落ちて来そうだったけど……」

傾きかけた屋根の光景に、健太がつぶやくと、里緒がおかしそうに笑った。

「確かに屋根も潰れそうだけど、もつと経済的になって意味で……」

「ああ、倒産とか、そっちの意味ね。でも、神社は会社と違うのだから、潰れるってイメージないけど」

あまりピンと来ない健太に、里緒が少し真面目な顔に戻った。言葉足らずを、もう少し説明する気になってくれたらしい。

「いまどきは神社にも少子高齢化の波が押し寄せているの。昔は神社って、子供の遊び場だったけど、今は子供が減ってるし、あまり外では遊ばないし。お年寄りには信心深いけど、うちって山奥にあるでしょう。参拝しようにもお年寄りにはきついよね。そんなこんなで、すっかり訪れる人も減ってしまっただけで、寂れてきてるの……」

いかにも美少女らしいソプラノ系のカワイイ声で説明されると、イメージしにくいのが、要するに玉申料や初穂料が集まらないらしい。

いくら小さな神社でも、小銭中心のお賽銭だけでは、やっていけないのだろう。お

祓いの初穂料や玉串料、お守りの授与料などの収入の多さが経営を左右するそうだが、それにはいかに信心を集めるかであり、参拝客が多いに越したことはない。

「参拝客が少なくても、確実にお祓いをゲットすれば、経営効率もよくなるでしょう」
ちなみにお札やお守りは、授けているのであって、売っているのではない。授与料も、あくまでも心付けとして冥加金を納めて頂いているのだそうだ。

「なるほどその効率を上げる作戦として、僕のような男性客に、過剰なサービスを思いついたって訳か……」

「だって、男の人っておバカで、そういうサービスに弱いし……。なんとか収入を上げなくちゃやっていけなくて……。お姉ちゃんなんか喫茶店でバイトしているのよ。もつともそれも、街の古びた喫茶店で大したバイト料ではないようだけど」

いつの間にか、また里緒の毒舌が復活している。その愛らしい貌をまじまじと健太は見つめた。途端に、恥じらうような表情になり、モジモジとはじめる。気の強さと女性らしい弱さを同居させた彼女に、健太は思わず噴き出した。

「な、何よお……」

「ごめん、ごめん。つくづく里緒ちゃんって家族思いだなあって。それに少子高齢化とか、経営効率とか、難しい言葉知っているんだね」

「何さ、バカにして……。まあ、確かにお姉ちゃんの受け売りだけどね……」

アヒル口を尖らせる里緒が、いつの間にか健太には愛おしく思えてきた。

どうにかして神社を盛り上げようと彼女なりに考えた行動が、あの不適切なサービ
スだったのだろうか。

信仰が薄れた神は、神さまでいられなくなると、何かの本で読んだ気がする。

狸穴稲荷神社のある村は、過疎化と高齢化が進み氏子が激減しているのだろう。しかも、神主は未亡人の深雪が勤めていると聞く。神主を女性が継ぐことは異例であり、それほどまでに窮しているということだろう。その娘である次女の里緒が巫女として手伝わなくてはならないほどに。

（うーん。不憫だけど、僕に何ができるだろう……）

義を見てせざるは勇無きなりとは言ったものの、新卒で研修生の自分に、できることなど高が知れている。

まして健太には、この神社で何を研修しろと言われているのかも判らない。まさか神社の再建を期待するわけでもあるまい。

難しい顔をする健太に、里緒が小首を傾げた。

「ねえ。健ちゃん、そんな難しい貌しないでよ……。あのね、お父さんの思い出が

詰まったこの神社をどうしても再興したいの。それを手伝ってくれるなら、さっきの続きしてあげるよ」

愛らしく頬を赤く染め、里緒がそつと囁いた。

小柄な女体が再び健太ににじり寄り、しなだれかけてくる。

「うん。判った。僕に何ができるとも思わないけど協力するよ。協力するけど、ひとつ約束して。僕がなんとかするから今日みたいなサービスはもうしないこと」

さっきの続きを期待したわけではない。純粹に里緒の手伝いをしてあげたいと思ったのだ。だからと言って、股間にすつと伸びてきた美少女の手を拒むことはできない。「なあに、健ちゃんやきもち焼いてる？ 判ったよ。もう誰にもあんなサービスしない。健ちゃんが初めてだったし……。でも、何か違う方法を一緒に考えてね……」

蕩けたような表情で里緒が、健太の股間をやさしく揉んだ。

くりつとしたアーモンド形の大きな瞳が潤みを帯びて、こちらを見上げている。初々しい色香が、色濃く漂っていた。

4.

「うおっ！ ぐふううっ」

ジーンズのアスナーの上のあたりを、小ぶりな手がしきりに摩っている。

畳の上に胡坐をかいている健太に上体をしなだれかけ、腕だけを伸ばすようにして里緒が股間に触れてくる。

その手つきは、先ほど同様、決して手馴れているとは言えないが、もどかしくもやるせない甘い刺激が、さざ波のように湧き起こる。

「これで、いいのかなあ？ これくらいが強さで気持ちいい？」

頬や耳朶、目の下までも赤く染め、里緒が健太の表情を窺っている。心細く長い睫毛が震えるのは、緊張のせいであろうか。

「り、里緒ちゃん……。いけないよ。こんなこと……」

かろうじて残された理性で、抗いの言葉を絞り出す。もやもやとした欲情が下腹部で燻るのを、なんとかして抑えなければと必死だった。

境内では流されてしまったが、先のことを考えると、今度はそうはいかない。研修先の娘に、それも未成年の女子高生と不適切な関係を結ぶわけにはいかないのだ。

「あら、どうして。健ちゃんのこと、里緒は気に入ったのだもの……。それとも健ちゃん、里緒のようなお子ちゃまではイヤ？」

親指の付け根がやわらかく竿先を押し潰し、鉤状に曲げられた指先が皺袋のあたり

を包み揉む。ぎこちなく、健太の様子を探りながらも、確実に官能の息吹を注ぎ込んでくるのだ。

「イヤじゃないよ。里緒ちゃんのようなカワイイ子にしてもらえるのだもの。でも、ほら、研修初日からこんなでは……。それに僕たち、まだお互いのことよく知らないじゃん……」

けれど、肉体は正直だ。自らの言葉に反し、下腹部には血液が集まり、肉の塊を形成していく。我ながら節操のなさを情けなく感じるものの、燎原の火の如く、性欲は燃え盛ってしまうのだった。

「でも、健ちゃんのここ、硬くなってきたよ……。やっぱり気持ちいいんだね」

うれしそうに笑みを浮かべる里緒の美貌にも、心なしか官能の色が兆している。健太の欲情がその手を通して伝わるのか、男性器の存在を感じ取り興奮しているのか、いずれにしても美少女が漂わせる初々しい発情色に、健太の理性は儂くかき消された。「はぐううっ！ い、いいよ！ 気持ちいいっ。里緒ちゃん！」

しなだれかかると女体がそのやわらかさを伝えようとするかのように、擦りつけてくるのもたまらない。どんなに華奢に見えても、その肉体はおんなを咲き誇らせていた。青い果実でありながら、その胸元などは、ゴムまりのような弾力で健太の胸板を押

し返すのだ。

すっかり頭の中をピンクの靄で覆われ、健太は美少女の背筋に手指を這わせた。

「んっ……」

女体がびくんと反応し、軽く背筋が仰け反った。

（うおおおっ！　なんてカワイイ反応をするんだ……。だめだ、こんな美味しいチャンス、逃せないよ……）

一度掌で触れてしまつては、もうまさぐらずにはいられない。健太は、小柄な里緒のフォルムを確かめるように、ゆつくりと掌を進ませた。

巫女装束の上からでも、その肌のなめらかさが判るほど瑞々しい。ぎゅつと搾れば、果汁が滴るのではないかと思われるほどの美肌なのだ。

「里緒ちゃんって、敏感なんだね……」

手指に触れられるたび、びくんびくと震える女体に、健太の興奮はさらに度合いを増している。

おかつぱロングの髪を掻き上げ、その白い首筋に唇をあてた。後れ毛の生えたうなじの甘さに、狂喜しながらレロレロと舌を這わせる。

「ひゃん！」

愛らしい悲鳴がアヒル口から漏れる。ぎゅっと閉じられた脛が、心なしか震えている。頬が強張り、戸惑いの色が浮かんた。どうやって官能をやり過ごせばいいか、明らかに困っているのだ。

(もしかして、あまり経験がないのかな?)

早熟に見せていても、案外里緒は初心なようだ。おずおずとした手淫からも、それと知れる。確かめてみよう、健太は美少女の胸元に手を運んだ。

「あつ! ああん、いやあ……」

案の定、ふくらみを覆われただけで、里緒は身を震わせて過剰な反応を示した。

けれど、触れた健太も少なからず驚いた。巫女装束の下、そのふくらみは、ノーブラだったのだ。

はじめて乳房を触られたかのごとき乙女の反応と、あまりにも生々しいぶにゅんとした感触に、健太はあわてて手を引っ込めた。

「り、里緒ちゃん、もしかして初めて?」

胸中の動揺を抑えようと健太は、里緒に尋ねた。けれど、その質問には恥ずかしそうに健太の胸板に顔を伏せるばかりで、答えようとしてくれない。しかも、美少女の手指は、なおも勃起を離れようとしなかった。

「いいよ……。いきなりおっぱいを触られて、ちよつと驚いたただけだから……。触りたいのなら触つても……。いいよ」

カワイイ台詞が、健太の男心をくすぐった。生々しい乳房の感触をもう一度味わいたい気持ちも芽生えている。

「じゃあ、遠慮なく……」

再び胸元に手指をあてがいがい、そのやわらかいふくらみをそつと掌で覆った。少しばかりごわつとした手触りながらも巫女装束は、やさしい肉感を伝えてくれる。しかも、その下には、やはりブラジャーの感触はなく、生の乳房が隠されているのだ。

未だ成長途中にあるふくらみは、どこか生硬な印象を持たせる。それでも、十分に男を惑わせる感触と昂らせるだけの弾力は否めない。

「やわらかいんだね……。里緒ちゃんのおっぱい」

巫女装束が持つ一種独特な雰囲気も、触れてはいけないモノに触れている気分させられる。

健太は衣擦れの音をさせ、下乳からあてがうようにして指の股で支え、ゆっくりと揉み潰した。

「はああう……。んふう……」

つやつやと赤く色づいた唇があえかに割れ、艶めいた声を漏れさせる。

生々しい触感、凄まじく掌性感を愉しませてくれて、さらに味わいたい気持ちにさせられる。

里緒が固く目を瞑り、するに任せてくれることを良いことに、さらに乳房をまさぐった。

ふんわりとふくらみを覆う巫女装束で乳肌を磨くような手つきで弄び、さらにはまだ見ぬそのフォルムを確かめるように撫でさする。

「ああ、素敵なおっぱい。里緒ちゃんのおっぱい、最高だ！」

乳房を触りたいだけ触っている健太。その手つきを真似るように、里緒の手指は勃起をまさぐってくる。

肉塊の容を探るように指先で圧迫したり、掌の中で躍らせるように弄んだり、しかも初々しい手つきは、徐々に慣れてきたのか、力の強弱をつけて確実に健太の快感を追うのだ。

「ぐああっ！ 里緒ちゃんがどんどん上手くなっていく。いやらしい手つき、気持ちいいよ」

込み上げる性感に、見境を失くした健太は、巫女装束と腕の隙間、袖口に手指を滑

り込ませた。

「あつ！ うそつ。ああ、そ、そんなことしちゃうの？」

水をはじくほどきめ細かな腕の白肌を掌で擦り、手首から肘部、二の腕、そしてさらにその奥を目指していく。大理石ほどもすべすべの膚はだに滑らせると、やがて瘦身の脇部へと辿り着いた。

「いけない？ こんなHなことをしちゃ、いけないよね？」

薄い肩をひと撫でしてから、指を伸ばし、デコルテラインに直接触れる。

熱い血潮をいよいよ肉塊に集め、屹立したペニスをぎゅいんと嘶かせた。

「ああ、すごい。健ちゃんのおちんちんが、ズボンの中で跳ねてるう……」

巫女装束の中に潜り込ませた手指をじりじりと下げ、なめらかな肌を直接堪能しながら、目的の地を目指す。

鎖骨を過ぎ、なだらかだった皮膚がゆつくりとせり上がりはじめる境目に到達すると、女体がぶるると震えた。

「ひゃん！ さ、触られちゃったね。ああ、里緒、おっぱいを生で触られてるう」

小顔が左右に振られると、おかつぱロングの髪がさらさらと一緒に揺れる。

乳肌をよほど敏感にさせているのか、掌に軽く擦りつけるだけでも、華奢な女体が

ひくん、ひくんと、艶めいた反応を示す。

しっとりとした膚下から生汗が滲み出してきている。それが健太には、里緒の肉体の全てが、愛液に濡れていくように感じられた。

5.

「あっ！ ああん……」

里緒の愛らしい鼻腔がくんと持ち上がり、可愛らしい呻きが漏れた。

健太の指先が、乳肌に食い込んだのだ。

「すっごく、すべすべだ。それにすごくやわらかい！」

快哉を漏らしながら健太は、乳房の感触を元に、そのフォルムを脳裏に浮かべた。

小さからず、大きからずの肉房は、あつらえたように健太の掌にすっぽりと収まる。

「くふううつ、ああん、なんだかくすぐつたい……」

細身を振る里緒のふくらみをできるだけのやさしさを壊す。

最初は、驚いたように乳房を跳ね上がらせていた美少女も、次第に「ああっ」と甘

い吐息をあげはじめた。

瑞々しい乳丘は、この分だと、ほとんど男に触れさせていないはずだ。その穢れな

い乳丘が、健太に触られるたび少しずつ反応を引き出されていくのだ。

「んふっ……あふう……ん、んんっ……ひううっ」

身体から芽生えはじめた快感に怖くなったのか、里緒が腰を引き気味に逃げるような素振りを見せる。けれど、袖から手を差し込まれているので、結局は大きく逃れることはできずにいる。そのうちに里緒も、じわじわと男の掌の感触に馴れてきたのか、ぎゅっとならぬ顔をして触るに任せてくれる。

中指が軽く肉に埋もれ、人差し指、薬指もやわらかい肉丘を窪ませる。

薄い皮下の遊離脂肪が自在に移動して、健太の指先に絡まり、まとわりつき、そして反発した。ひと揉みごとに上昇する里緒の体温は、そのまま彼女が発情する証だ。

「あうん。ああ、どうしよう。おっぱいが火照ってきちゃうう……」

その言葉通り、乳肌がじつとりと汗ばんできて、まるでコールドクリームでも塗ったかのようにヌメすべる。

新陳代謝旺盛な年頃らしく、里緒は汗っかきな体質らしい。

「おっぱい感じるんだね……。触っている僕の手も蕩けそうだよ」

首筋にちゅっとならぬ口づけすると、くすぐったそうに首をすくめる。繊細な髪に顔をくすぐられるのが心地よい。

掌を返し、下乳の盛り上がりからデコルテラインにかけて、手の甲で撫でさする。

途中、指の背にコリコリとした突起物が当たるのは、硬くさせはじめた乳首だ。感触だけでは判らないが、やや上向きの小ぶりのグミは、きつと純ピンクであるはずだ。

「はううっ……んんっ、あ、あうっく……」

時折、びくんと身を震わせるのは、湧き出てくる甘い快感が、乳房内に漂い出すのだろう。次第に、健太は力を入れて、容のよい乳房を揺すり、時折り乳首を指に引っかけるようにして転がしてやる。

「あうんっ……あ、あふん……んあ、あ、ああ〜んっ!!」

やがて里緒は乳首に触れられるたびに、熱く吐息を漏らすようになった。

敏感な乳房のなかでも、この部分に特に反応してしまう。触れられると下腹部の方まで痺れが走るのか、太もも同士を擦りあわせる素振りまで見せている。

あからさまな反応に気をよくして、健太は乳蕾を指先に捉えた。親指と人差し指の腹に挟み、ダイヤルを捻るようにやさしく摘まみ回すのだ。

ツンツンにしこりを帯びた乳首の弾力が、そのまま健太の指先性感をダイレクトに刺激してくる。

「きゃうっ！ やだ、おっぱいが、いつもと違う」

紅潮させた頬を強張らせ、里緒が狼狽したように訴えてくる。

「いつもとどう違うの？」

健太は、おかつぱロングの髪に鼻先を溺れさせたまま、耳元で囁くように尋ねた。

「気持ちよすぎて、おっぱいに鳥肌が立ってるの。それに乳首からHな刺激が届いちやう……。里緒の乳首こんなに硬くなるの初めてだよぉ〜っ！」

まるで痴漢のような手つきで、巫女装束の中の乳首をなおも弄り回す。指と指の間ですり潰したり、指先でなぎ倒したり、クリクリと回し転がしたりと、里緒が女体をひくつかせるのを良いことに、たっぷりと愛撫した。

コリコリにしこりまくる乳萌は、ついには白い巫女装束の上からでもその存在が判るくらいに膨らんでいる。

「乳首、すぐく勃^たってきたね……」

調子づく健太の声に、里緒も自らの乳丘を眺めた。

薄布に覆われた双つの丸みの中心で、小豆大のぼつちが飛び出している。健気にも首を伸ばし、ここを触つてと自己主張するようだ。

里緒自身も、自分の乳首がこんなに大きくなり、男を誘うかのように色づいているのを見るのは初めてらしい。健太に弄らせたせいではあっても、発情のサインを出し

ている事実が、里緒を羞恥の淵に追い込んだようだ。

「やはり感じているんだね。こんなに勃起して……」

さんざん弄られ熱を帯びている乳房の頂点を、健太は巫女装束の上から唇に含んだ。
「あ、はぁん……ッ！」

制御しがたい激しい快感に、里緒が甲高く啼いた。

誰に教わったわけでもないであろういやらしい喘ぎが、次々に零れ出す。

清楚な美少女が、これほどまでに艶めいた喘ぎを漏らすことに、健太は脳髓が蕩けそうになるほどに喜んだ。

「そんなに、気持ちいいの？ ほら、もつとしてあげるよ！」

さらに強く吸いつき、同時に多量の涎で装束をぐしょぐしょにする。白い薄布が乳首を透けさせはしまいかと、期待したのだ。けれど、涎シミにそっだけ黒くさせたものの、残念ながら透けるまでには至らなかった。

「あぁん、あ、あぁぁん……っ」

健太が乳首に歯牙を軽く当てると、里緒は反射的に大きな声を出してしまった。

それが恥ずかしいとばかりに、あわてて口を閉ざし、首を背けて美貌を自らの髪の中に埋めている。

「ああ、だめえ……。どうしよう、背筋にぞくぞくつて……」

「里緒ちゃんのおっぱい、弄ばれるたびどんどんいやらしくなっていくね。ほらほら、こんなにやわらかくもなつたよ！」

健太は興奮の面持ちで、再び巫女装束の上から里緒の左右の乳房を中央に寄せた。生硬い印象のあつた肉房は、やわらかさを増し簡単に形を変えて集まってくる。

「もう、健ちゃんのHいつ！ 里緒のおっぱい、こんなにさせてえ……。どうするつもりよお……。よおし、こうなつたら、里緒も仕返ししちゃうんだからあ」

胸元に発情のしこりを膨らませたまま、里緒が軽い体重を預けるようにして健太の upper body を押してきた。

「うおっ！」

思いがけない力に、健太は畳の上に身体を横たえた。里緒も健太の上に、寄り添うように乗っている。

「今度は、里緒の番！ 健ちゃん、覚悟しなさい！」

ツヤツヤの頬を緩ませ、里緒が健太のジーンズのファスナーを摘まんだ。

「えっ？」

驚く健太を尻目に、ジジジッとファスナーが下げられた。

「先に里緒のおっぱいに生で触れたのは健ちゃんだからね。今度は里緒が、生おちんちんに触れちゃうんだから……」

「そ、それは……だけど……」

言葉を探している健太の隙をつくように、里緒はパンツの前合わせのなかから肉塊を掴み出した。

「うああ……」

すべやかな手指の感触だけで、健太は情けない声をあげてしまう。

赤剥けた怒張が零れ出ると、里緒がそれを目線だけで盗み見ている。

生温かな牡の恥臭にプツクリと小鼻を膨らませ、「ああ……」と吐息を漏らした。

「お、大人の男の人って、こんなになるんだね……。ちよつとグロいかも……」

正直な感想を漏らす里緒が、微笑ましい。それでいて、まるで遊女になりきっているかの如く、やわらかく肉棒に手指を巻きつけてくる。

どこか恐々といった手つきであったが、興味と興奮を相半ばさせた表情は隠しようがない。

「ぐふううっ！」

肉塊に絡みつく手指のふつくらした感触。発情掌の人肌の温もり。ぎこちない手づ

かみだったが、込み上げる性感は恐ろしく心地いい。

「これでいいのかなあ……。これくらいの強さでもいいの？」

肉幹をグッと絞られると、鈴口からヌメヌメしたカウパー汁が玉のように滲み出た。「り、里緒ちゃん！」

込み上げる快感に声を掠れさせ、菊座を絞った。そうでもしなければ、あっけなく果ててしまいそうなのだ。

「うふふ。こうすれば煩惱を払うことができるでしょ。これもお勉強です」

健太の官能が肉幹から伝わるのが、いかにもうれしいといった様子で、手筒を小刻みにストロークさせてくる。

「うおっ！ あ、ああ、ちよつ、ちよつと……。ま、待つて」

懸命に手を振り解こうとしても、急所を握られては思うに任せない。

健太は情けなくも目を白黒させながら、込み上げる悦楽と向かいあうばかりだ。

「ど、どうかしてるよ、里緒ちゃん……。こ、こんないけないこと……。ううう、き、気持ちよすぎだ……」

手こきの快楽に押し流されながらも、健太は上ずった声で不埒な美少女を戒める。先ほどまで自分が里緒に対して行っていた乳房への悪戯をすっかり柵に上げている。

つまりは、美少女に翻弄される自分が、男として情けなく感じているのだ。

「気持ちいいのなら、いいじゃん。私は健ちゃんのこと気に入ったのだし、その代わり約束通り、協力してよね」

間近にある美貌が、妖しく白い歯を覗かせた。ほとんど愛の告白にも近いセリフを吐きながら、それを免罪符になおも手指を絡めてくる。

里緒もよほど興奮しているのだろう。その眼差しはどこか挑みかかるようでもある。もしかすると、美少女は健太の勃起に挑むことで、大人の階段を一段上ろうとしているのかもしれない。腰部を甘美に痺れさせながら、健太はそんなことを想っていた。「もっと気持ちよくさせてあげるにはどうすればいいの？ もっとお擦りする？」

肉幹をしごくような動きに、亀頭部を半ば包んでいた肉皮がずるりと滑り落ちる。肉エラがすっかり赤剥けると、ずずんと重い淫波が脊髄を走り抜けた。

「きゃあ、こんなに剥けて痛そう……！ 辛くないの？」

自らのしでかした仕業に、美少女が驚きの悲鳴をあげた。

「大丈夫だよ。そうされると、むしろ気持ちいいが増すんだ。大丈夫だから、もっと擦って……」

さんざめく快感に、健太はついに本音を吐いた。膨れ上がる欲情を白濁と共に吐き

出したくて仕方がないのだ。

できうるならば、そのふつくらした唇でもして欲しいところだが、さすがにそこまでは口にできなかつた。

「男の人つてすごいんだね。どんどん硬さが増してくる。それに熱くつて、里緒の掌、おちんちんに灼きついちゃいそう……」

もう二十三にもなる健太だから、経験もそれなりにある。けれど、これほど完璧な美少女に手淫されるのだから、牡汁を撒き散らしそうになるのも無理はない。しかも、ここに到着してからというものの性的刺激に溢れた時間ばかり過ぎてしているのだ。限界まで膨張した肉塊が、血管の筋をありありと浮かばせ、エラを張らせるのも無理はなかつた。

「ああ、すごく大きくなってる……。でもやっぱり火傷の火ぶくれみたいで、可哀相なくらいに辛そう……」

上目づかいにつぶやき、頬を染め、里緒は今にも勃起に頬擦りをするのではないかと思われるような表情をしている。

ごつごつと醜い勃起肉と幼気な美少女との組み合わせは、ものすごく退廃的だ。

「お擦りしてあげる。いいよ。里緒の手の中に、射精しても……」



健太の先走り汁で、手指がぬめるのに構いもせず、再び手筒で擦るように、ず、ずうう……じゆる、とスライドさせはじめる。

ぎこちなく思えた動きが、徐々にリズムミカルになるにつれ、健太の愉悦はさらに燃え盛った。

「ぐおおおっ！ ああ、気持ちいいっ。ああ、里緒ちゃあ〜んっ!!」

小ぶりの手が、むぎゆりと締めつけを強くする。指の輪にエラ部を擦られると、たまらず腰を跳ね上げた。

「ああん。すごい。健ちゃん本当に、気持ちよさそうな貌をしてるう」

経験が不足している分、単調な動きだったが、それを補うに余りある甲斐甲斐しさと真剣さがある。

「だって、気持ちいいんだ。里緒ちゃんのお擦り、最高だよ！」

さんざめく喜悦を訴えると、里緒の手コキスピードが増した。

ずるんずるんと肉皮を大きく速く上下させ、さらに健太を追い込んでくる。

「すごい！ こんなのが挿入^{はい}っちゃうんだね……。いつか里緒も、これを挿入^{はい}れさせてあげるからね……。でも、それはもう少し先。今日は、これで我慢して……」

いつかさせてくれる。その時を想像するだけで、健太の射精衝動は限界を迎えた。

「ぐああ、射精^でる。射精ちやうよつ！ 里緒、キスして。約束のキスをおくくつ！」

口づけを求める健太に、里緒がこくりと頷くと、赤い唇を寄せてきた。

ふつくらとした唇の感触。健太は舌を伸ばし、美少女の口腔に舌尖をねじ込んだ。歯や歯茎の裏、口腔粘膜をたつぷりと舐り、やわらかい舌に同じ器官を擦りつける。

「ふぐうううっ！ ふむうううっ！ ふううううううううううううううう！！」

舌を絡ませ、ひしゃげるほど唇をつけ、互いの唾液を交換する。

激しいキスの最中も、健気な里緒の手淫はやまない。お蔭で、健太の官能はドロドロに蕩け尽くし、ついに射精の火ぶたを切った。

「ぐふううううううう。ぬううううううううううう！」

懸命に締めていた菊座を解放すると、欲望の溜まりきった皺袋から白いマグマがずどどどと尿道を駆け上った。

やわらかい唇を味わいながら射精するしあわせ。ぶるぶると下半身を痙攣させながら熱い牡汁が鈴口から次々に飛び出してくる。

里緒の白い手指を穢し、飛沫の一部を巫女装束にまで引っかけてしまった。

それでもなお、射精発作は収まらない。

里緒も二度目三度目の発作を促すように、精液まみれとなった右手をなおもしごき

たてている。しかも、互いを貪りあうような口づけが、いつの日かの契りを誓いあい、
熱く熱く続くのだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>